

### 3 どの子どもがしあわせになれる 福祉をねがって

徳永 満理まり (社会福祉法人おさなご福祉会理事長)



#### 女性が人間らしく生きるためには……◆

一九七〇年に西南大学短期大学部児童教育科を卒業した私は、単身で福岡の片田舎から兵庫県尼崎市に出てきて、杉の子共同保育所に入職しました。きっかけは、タイトルを忘れてしまったのですが、橋本宏子氏(神奈川大学名誉教授)の著書でした。男性優位社会のなかで女性が人間らしく生きていくためには、社会参加と生産労働に携わること、そして保育所の役割が大切だと説いておられたと思うのですが、学生時代に読んで感銘を受けていました。

時代は高度経済成長のただ中にあり、大阪万博で沸き立っていました。製造業を中心として世界に活路を

広げていた企業は、中学卒業後の就職者を「金の卵」ともはやし、重宝に使用していました。それでも人手不足は解消できず、これまで家庭内労働が中心だった女性たちにも社会進出が求められるようになっていました。

そんななか、乳児を抱える女性たちの声からはじまった「ポストの数ほど保育所を！」という運動が全国各地に広がり、私は乳児ばかりを受け入れて保育する無認可の共同保育所で働くことで、この運動のうねりのなかに身を投じることとなりました。

#### 働く人たちのなかで育てられて……◆

尼崎市は大阪府に隣接し当時は阪神工業地帯の中心

地であり、工場からの煤煙や国道43号線を走行する自動車の排気ガスがもたらす公害地域でもありました。杉の子共同保育所はその南部に位置した杭瀬くわいせという街にあり、すぐ側には一級河川の神崎川かみさきがわがあり、工場の汚染水で川底はどす黒いヘドロで充満していました。

動めはじめのころは、その環境に慣れずに田舎に帰ろうかと悩んだこともありましたが、乳児を背負ってやってくる父母のほとんどが故郷を離れ、職を求めこの地にやって来た人たちでしたから、産休が開けてもみてくれる人がいないのです。

そんな人たちのねがいから生まれた、長屋の一角の小さな保育所で保育することの意味を考えると、やっぱりがんばらうと思う日々でした。

ある運番の日のこと、仕事でトラブルがあり息せき切って一八時過ぎに迎えにきた親子と一緒に鍵を閉めての帰り際、「子どもはもしかしたら先生のことを忘れてしまうかもしれませんが、私たち親はいつまでも忘れませんよ」と切実な思いを語ってくれた母親の言葉を、今も胸にしまっています。

そんな働く女性たちとの出会いや、子どもたちを市長室の控室で保育しながら対市交渉をしたり、公害で

ぜんそくになった子どもたちを思っって関西電力との交渉に参加したり、共同保育所の認可化運動に参加したりするなかで、私は育てられたのだと感謝しています。

#### 保育を通して福祉を考える……◆

共同保育所に勤務してからの五二年間、私は認可された杉の子・太陽の子保育園で保母を九年間、おさなご保育園で二八年間の園長を経て、現在はおさなご福祉会の理事長をしています。

その間に保育制度は改革され、新システムによつて幼保一体化、直接契約、保育の市場化がされ、子どもに対する差別・選別の政策がすすみ、児童福祉法二四条が形骸化されていくことに危惧を感じています。

最後に、昨年から始まって今も収束の見えないコロナ禍以前から問題になっている、貧困・格差による子どもの貧困化や虐待等は、コロナ禍後にはより深刻化することは火を見るより明らかです。

そのようななかで、保育を必要とするすべての子どもに安心・安全、そして発達する権利を保障するのが保育所の役割だと思いつつ、理事長としては社会福祉事業の市場化に対しての今後を模索しているところです。